

ふくしまレッドリスト(2020年版)見直しの理由

	生物群名	目名	科名	和名	学名	ふくしまRL2019(旧)カテゴリー	ふくしまRL2020カテゴリー	見直しの理由	参考文献
1	維管束植物		サトイモ科	オオマムシグサ	<i>Arisaema takedae</i> Makino	未掲載	絶滅危惧IA類	標本が1点のみで近年確認できていない。草地性のマムシグサで生育適地が減少しているものと思われる。東北では山形県と秋田県のレッドリストに入っている。	
2	維管束植物		サトイモ科	ヒメカイウ	<i>Calla palustris</i> L.	未掲載	情報不足	中通り地方に記録があるが標本が確認されていない。	関東森林管理局. 2011. 平成22年度保護林の設定に向けた調査事業報告書 五十嵐ほか. 2004. 安達太良山の植物 7 安達太良山系のフロラについて. フロラ福島21: 9-38.
3	維管束植物		トチカガミ科	トチカガミ	<i>Hydrocharis dubia</i> (Blume) Backer	絶滅	絶滅危惧IA類	南会津郡下郷町の池で生育を確認した(薄葉 未発表)。生育面積約30㎡(スイレンと混生し密度は低い)管理地ではあるが、イヌタヌキモやコウホネもみられるので自生と思われる。標本データ: Usuba-26995。危険要因: スイレンとの競合が考えられるが、除草圧も視野に入れる必要がある。	
4	維管束植物		ヒルムシヤナギモ		<i>Potamogeton oxyphyllus</i> Miq.	未掲載	準絶滅危惧	湖沼や河川の普通種であったが、河川改修や水質悪化により生育地が減少し、県内では比較的珍しい種となっている。	
5	維管束植物		ラン科	アキタスズムシソウ	<i>Liparis longiracemosa</i> Tsutsumi, T.Yukawa et M.Kato	未掲載	絶滅危惧IB類	2019年に新種として記載された(Tsutsumi et al 2019)。福島大学貴重資料保管室植物標本室には北塩原村の2箇所から採集された標本がある(M. Endo et al. 299, FKSE85138; M. Yamaguchi et al. 373, FKSE89590)。	Tsutsumi, C., T. Yukawa and M. Kato. 2019. Taxonomic Reappraisal of <i>Liparis japonica</i> and <i>L. makinoana</i> (Orchidaceae). Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. B, 45: 107-118.
6	維管束植物		ラン科	ジンバイソウ	<i>Platanthera florentii</i> Franch. et Sav.	未掲載	準絶滅危惧	福島県植物誌編さん委員会(1987)で白河市、郡山市、飯豊山、大沼郡の5箇所の生育地が報告され、福島大学貴重資料保管室植物標本室にはこれらとは別の11箇所から採集された標本がある(相馬市, K. Iga 555, FKSE21666; 相馬市, K. Iga 631, FKSE21748; 相馬市, S. Kanno s. n., FKSE68490; 南相馬市, N. Sakurai s. n., FKSE pauched-428; 浪江町, F. Suenaga s. n., FKSE33642; 浪江町, N. Sakurai s. n., FKSE35815; 伊達市, F. Suenaga s. n., FKSE30449; 福島市, Y. Endo 21, FKSE67767; 喜多方市, S. Saito 30777, FKSE40281; 金山町, S. Saito 16453, FKSE40075; 西会津町, unknown collector s. n., FKSE23717)。26都道府県で保護上重要な種扱い。	福島県植物誌編さん委員会(編). 1987. 福島県植物誌. 福島県植物誌編さん委員会, いわき.
7	維管束植物		キジカクシ科	キジカクシ	<i>Asparagus schoberioides</i> Kunth	未掲載	絶滅危惧IA類	福島県植物誌編さん委員会(1987)でいわき市、田村郡、郡山市、表郷村、矢祭町、磐梯町、下郷町の9箇所の生育地が報告され、福島大学貴重資料保管室植物標本室にはこれらとは別の2箇所から採集された標本がある(田村市, H. Sase 52-108, FKSE9059; 会津坂下町, S. Saito 4944, FKSE48470)。いずれも1980年代以前の記録または標本である。	福島県植物誌編さん委員会(編). 1987. 福島県植物誌. 福島県植物誌編さん委員会, いわき.
8	維管束植物		イグサ科	ホソイ	<i>Juncus setchuensis</i> Buchenau var. <i>effusoides</i> Buchenau	未掲載	絶滅危惧IA類	新地町埴木崎の震災後に生じた湿地の1箇所に数株が生育することが確認された(薄葉 2018)。確認された産地は水田の復旧で消失した。これまで福島県植物誌編さん委員会(1987)等でホソイとされた植物はイグサまたはエゾホソイと考えられる(薄葉 2018)。	福島県植物誌編さん委員会(編). 1987. 福島県植物誌. 福島県植物誌編さん委員会, いわき. 薄葉満. 2018. 福島県におけるホソイの初見および福島県植物誌(1987)の記録について. フロラ福島(33): 31-33.
9	維管束植物		キンポウゲ科	ジョウシュウトリカブト	<i>Aconitum tonense</i> Nakai ex H.Hara	未掲載	絶滅危惧II類	サンヨウブシのシノニムとされることもあるが、DNA解析からは明らかに別種である。産地極限、鹿の食害を受けている。具体的には、尾瀬周辺の限られた所でしか見つかっていないものの、生育適地が人が入れないところがほとんどで、個体数はそれほど少なくはなさそうである。一方、アコニチンを含まず、確認できる場所では鹿の食害が激しい。	中屋敦徳・出羽厚二・沢和浩・根本秀一・大森威宏. 2018. 新潟県湯沢町におけるジョウシュウトリカブト <i>Aconitum tonense</i> とハクバブシ <i>A. zigzag</i> subsp. <i>kishidae</i> (キンポウゲ科) の混生について. 植物地理・分類研究 66(2), 201.
10	維管束植物		スミレ科	ゲンジスミレ	<i>Viola variegata</i> Fisch. ex DC. var. <i>nipponica</i> Makino	未掲載	絶滅危惧IA類	現存しているのは磐梯町の1箇所のみで未開花株も含めて10株程度である(遠藤ほか 印刷中)。	遠藤雄一・根本秀一・山下由美・黒沢高秀. 印刷中. 福島県におけるスミレ科ゲンジスミレの現存の確認. フロラ福島.
11	維管束植物		ナデシコ	イトハコベ	<i>Stellaria filicaulis</i> Makino	未掲載	絶滅	これまで福島県で報告がなかったが、1907年に西白河郡で採集された標本が東京都立大学牧野標本館MAKで確認された(黒沢 未発表)。それ以降生育が確認されていない。	

12	維管束植物		アカネ科	ミヤマムグラ	<i>Galium paradoxum</i> Maxim. subsp. <i>franchetianum</i> Ehrend. et Schönbr.-Tem.	未掲載	絶滅危惧II類	福島県植物誌編さん委員会(1987)でいわき市、吾妻山、大滝根山、東白川郡、猪苗代町の6箇所の生育地が報告され、福島大学貴重資料保管室植物標本室にはこれらとは別の2箇所から採集された標本がある(浪江町, N. Sakurai s. n., FKSE35486; 郡山市, Y. Yamashita 1111 & 1387, FKSE91314 & 94677)。	福島県植物誌編さん委員会(編). 1987. 福島県植物誌. 福島県植物誌編さん委員会, いわき.
13	維管束植物		オオバコ科	キクバクワガタ	<i>Veronica schmidtiana</i> Regel subsp. <i>schmidtiana</i>	未掲載	情報不足	喜多方市の風穴から自生状態で見つかった。人為的に移殖された可能性が残る。	根本秀一・黒沢高秀. 2020. 本州新産のキクバクワガタ(オオバコ科). 植物地理・分類研究 68(1), 63-65.
14	維管束植物		シソ科	シラゲヒメジソ	<i>Mosla hirta</i> (H.Hara) H.Hara	未掲載	絶滅危惧IA類	福島県植物誌編さん委員会(1987)で伊達市、白河市、会津坂下町の3箇所の生育地が報告されているが、標本が確認されていない。福島大学貴重資料保管室植物標本室には標本がない。東北大学植物園TUSに1枚の標本が確認された(黒沢 未発表)。	福島県植物誌編さん委員会(編). 1987. 福島県植物誌. 福島県植物誌編さん委員会, いわき.
15	維管束植物		キク科	ヤマノコギリソウ	<i>Achillea alpina</i> L. var. <i>discoidea</i> (Regel) Kitam.	未掲載	絶滅危惧IA類	福島県植物誌編さん委員会(1987)で飯館村、いわき市、日山、大滝根山、移ヶ岳、郡山市、鮫川村、塙町、猪苗代町、会津若松市、下郷町の13箇所の生育地が報告され、福島大学貴重資料保管室植物標本室にはこれらとは別の2箇所から採集された標本がある(二本松市, N. Sakurai s. n., FKSE32032; 会津若松市, H. Sase 194-287, FKSE6102)。このうち1990年代以降に確認されているのは1箇所のみである。	福島県植物誌編さん委員会(編). 1987. 福島県植物誌. 福島県植物誌編さん委員会, いわき.
16	維管束植物		キク科	ホソバオグルマ	<i>Inula linariifolia</i> Turcz.	未掲載	絶滅危惧IA類	これまで福島県で報告がなかったが、福島大学貴重資料保管室植物標本室には相馬市の1箇所から採集された標本がある(相馬市, N. Sakurai s. n., FKSE35463)。環境省II類。	
1	昆虫類	チョウ目	タテハチョウ科	ヒョウモンモドキ	<i>Melitaea scotosia</i> Butler	絶滅危惧I類	絶滅	本種が現在も生息確認されているのは福島県中部のみであり、その他の産地ではすべて消滅したとされている(環境省(編), 2015)。本種の生息環境である湿地や採草地などの湿性草原は全国的に激減しており、その生息環境の悪化は顕著である。本県における本種の記録は確実なものであるが、情報量はもともと3件のみと少ない。最後の記録は1974年の水野谷氏による採集記録であり(水野谷, 1998)、この記録から46年が経過し、この間、精力的な調査実施にもかかわらず、再発見されていない。過去に茨城県笠間市における記録が存在するが、現在は茨城県でも「絶滅」となっている。過去50年間前後の間に生息情報が得られていないことから、「絶滅」との評価(「絶滅」の定性的要件は「過去50年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない」)は妥当と考えられる。	水野谷昭三(1998)ヒョウモンモドキの西郷村での記録, ふくしまの虫, (16): 53. 田添京二(1974)福島県のゴマシジミとヒョウモンモドキ, 昆虫と自然, 9(11): 32-33. 福島県立白河高校生物部(1953)白河地方の蝶, 新昆虫, 6(9): 16-17. 環境省(編)(2015)レッドデータブック2014 5. 昆虫類, ぎょうせい, 東京.
2	昆虫類	チョウ目	タテハチョウ科	コヒョウモンモドキ	<i>Melitaea ambigua nippona</i> Butler	情報不足	絶滅	本種の生息が現在確実に確認されているのは群馬県、山梨県、長野県、岐阜県の4県であり、その他の県では絶滅かそれに近い状況である(環境省(編), 2015)。本種の生息環境は草地であり、全国的に減少が顕著である。本県における本種の記録は確実なものであるが、情報量は1971年の1件と少なく(松枝岐村キリンテ野営場内, 3-VIII-1971, 1♂, 飯村孝文(新部, 1992)), この記録から49年間、精力的な調査実施にもかかわらず、再発見されていない。過去50年間前後の間に生息情報が得られていないことから、「絶滅」との評価(「絶滅」の定性的要件は「過去50年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない」)は妥当と考えられる。	新部公亮(1992)福島県産新記録種コヒョウモンモドキについて, Butterflies(3): 53. 環境省(編)(2015)レッドデータブック2014 5. 昆虫類, ぎょうせい, 東京.
3	昆虫類	チョウ目	タテハチョウ科	ギンボシヒョウモン	<i>Speyeria aglaja fortuna</i> (Janson)	準絶滅危惧	絶滅危惧II類	本種の1990年以降の記録は7件しか存在せず、他の準絶滅危惧種の記録数と比較しても圧倒的に少ない。本種は東北地方では稀で(白水, 2006)、現在は減少し、ほとんど見られない状況になっている(日本蝶類保全協会編, 2019)。本種の福島県内における生息環境が標高800m以上の山地草原であることを考えると、そのような場所は近年減少傾向が著しく、定性的要件に照らして評価すると、本種は確実な情報はあるものの、大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつあると考えられ、「絶滅危惧II類」との評価(「絶滅危惧II類」の定性的要件の一つ、「確実な情報がある場合、大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある」)は妥当であると思われる。	渡辺 浩(2017)新・福島県の蝶, 「新・福島県の蝶」編纂委員会, 福島. 郡司正文(2001)福島県産チョウ類の変異と異常型(その2), ふくしまの虫, (20): 8-9. 小島吉男(1999)安達太良山でギンボシヒョウモンを目撃, ふくしまの虫, (18): 136-137. 水谷吉勝(1999)原町市東が丘・上町湿地の昆虫相, ふくしまの虫, (18): 103-105. 白水 隆(2006)日本産蝶類標準図鑑, 学研, 東京. 日本蝶類保全協会(編)(2019)フィールドガイド日本のチョウ増補改訂版, 誠文堂新光社, 東京.

4	昆虫類	チョウ目	タテハチョウ科	ヒョウモンチョウ本州中部亜種	Brenthis daphne rabdia (Butler)	絶滅危惧II類	絶滅	現在のふくしまレッドリスト絶滅危惧II類5種の中で、唯一野外で見ることが叶わない種である。1970年代以降10件の記録が存在するが、直近の2件についてはその信憑性に多少の疑問が残る。 ①2007年尾瀬ヶ原の記録(草刈(2014))について:本種の近似種にコヒョウモンがあるが、本種との翅斑紋での比較同定は非常に難しく、目撃という形で判断したとすれば不安が残る。提案者も複数回尾瀬ヶ原見晴で調査を行い、確実にコヒョウモンは複数個体採集の上同定し確認済であるが、ヒョウモンチョウについては確認することができなかった。 ②1996年下郷町阿賀川水系の記録について:この標本は現在、大川ダム管理事務所から提案者に管理が移管されている。しかし、ラベルは間違いなくヒョウモンチョウであるが、肝心の標本がオオウラギンスジヒョウモンであった。採集者の樋氏はこの他に、下郷町のオオイチモンジやヒメギフチョウを採集しており、それらは標本とラベルは一致している。よって、単純な同定ミスとも考え難い。どこかで標本が入れ替わった可能性も考えられるが、氏は亡くなれているので確認のしようもない。 本種は福島県では稀で、その生息環境である山地草原は近年減少傾向が著しい。尾瀬地域から目撃情報ではなく、証拠標本に基づく記録は過去にも見いだせず、分布していない可能性が高い(過去の情報はすべてコヒョウモンの誤同定と思われる)。定性的要件に照らして評価すると、本種は確実な情報はあるものの、既知の産地であった西郷村や下郷町を含む甲子高原から南会津地域にかけてのすべての生息地で生息条件が著しく悪化しており、その後の精力的な調査にもかかわらず、その記録から60年以上も未発見である。また、田添(1974)による南会津、天栄、川俣の記録については、具体的な採集日の記載がなく、その情報入手先を追跡することは不可能である。なお、1996年の記録については、上述のとおり、その信憑性を検証できない。以上の点から、本種は過去50年間前後の間に生息情報が得られていないことから、「絶滅」との評価(「絶滅」の定性的要件は「過去50年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない」)は妥当と考えられる。	草刈広一(2014)直翅・トンボ類を主体とした尾瀬地域のレッドリスト調査報告, InsecTOHOKU, (35): 2-10. 田口四十三(2012)佐久間博先生を偲んで、ふくしまの虫, (30): 26-36. 佐久間博(1963)福島県産蝶類3種, 蝶と蛾, 14(1): 26-27. 蜂谷剛(1958)福島県の蝶類追記, 福島生物, (1): 37-38. 田添京二(1974)福島県の蝶相, らふあえりす, (2): 1-5.
5	昆虫類	トンボ目	エゾトンボ科	ホソミモリトンボ	Somatochlora arctica (Zetterstedt)	情報不足	絶滅危惧II類	本種の本州における分布は、中部山岳域と尾瀬地域のみと非常に限定的で、福島県では尾瀬沼周辺からしか記録がない。レッドデータブックふくしまI(2002)では「未評価」、レッドリスト2019では「情報不足」とされている。1995年に県自然保護課に1件の記録が報告されたが、これは標本や画像などの証拠が残されていない目撃記録であり(太田氏私信)、福島県内からは1958年の尾瀬沼、裏燧の記録以降の記録はなかった。その後、太田(2020)により、尾瀬沼(大江湿原で2オス、沼尻平で1オス)から2018年に本種の生息が確認され、尾瀬沼には現在も分布していることが明らかにされた。太田(2020)は尾瀬ヶ原の群馬県域(牛首分岐で1メス)でも本種の分布を確認しているため、尾瀬ヶ原の福島県域には本種が分布する可能性は考えられる。 尾瀬の湿原域は自然公園法や文化財保護法などにより、その生息環境は強固に保護されているが、近年の温暖化に起因する豪雨やシカ被害などにより、生息環境は広範囲で悪化しつつあるものと考えられる。したがって、定性的要件に照らして評価した場合、「絶滅危惧II類」とのカテゴリ(「確実な情報があり、大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある」)が妥当であると思われる。なお、尾瀬地域を共有する近隣県では、本種は群馬県では絶滅危惧II類、新潟県では準絶滅危惧に指定されている。	太田祥作(2020)福島・群馬・栃木県で2018-2019年に確認されたホソミモリトンボの記録-60年ぶりに再発見された福島県での観察例など-, TOMBO, 62: 116-122. 福島県生活環境部環境政策課(編)(2002)レッドデータブックふくしまI(福島県の絶滅のおそれのある野生生物(植物・昆虫類・鳥類)), 福島県.
1	鳥類	ペリカン目	サギ科	オオヨシゴイ	Ixobrychus eurhythmus (Swinhoe, 1873)	絶滅危惧IA類	絶滅	1970年頃より減少し、1998年矢吹町で3例確認以降の県内の記録はない。近年まで全国各地でも情報は激減している。県内各地域の確認情報や開発に伴う環境アセスメント鳥類調査等での情報からも確認が全くないことから、本県での生息は絶滅したものと考えられる。	福島県:ふくしまの野鳥(1996),レッドデータブックふくしま(2002),福島県レッドリスト(2017-19),福島県日本野鳥の会連携団体連合会,福島県鳥類総目録(2015)
2	鳥類	チドリ目	シギ科	オオジシギ	Gallinago hardwickii (Gray, 1831)	絶滅危惧II類	絶滅危惧IB類	近年開発や放棄牧草地等による繁殖地の減少により、会津と中通りのごく限られた場所しか記録がない。今後県内での生息が危惧される。特に中通りでの繁殖地は自然再生エネルギー開発による影響で消滅する可能性が高い。また春秋の渡り時期には沿岸部等で通過個体の記録がある。しかし観察が難しい種であるため、確認情報が少ないと推測する。	福島県:ふくしまの野鳥(1996),レッドデータブックふくしま(2002),福島県レッドリスト(2017-19),福島県日本野鳥の会連携団体連合会,福島県鳥類総目録(2015)
3	鳥類	ハヤブサ目	ハヤブサ科	チゴハヤブサ	Falco subbuteo Linnaeus, 1758	絶滅危惧II類	絶滅危惧IB類	会津地方、中通りの限られた地域で少数が繁殖をしている。近年県内では樹木以外に送電線鉄塔のカラスの古巣などを利用する事例が確認されている。春秋の渡り時期には県内を少数が通過していると考えられる。しかし県内で確認される数は少なく、今後注視が必要な種である。	福島県:ふくしまの野鳥(1996),レッドデータブックふくしま(2002),福島県レッドリスト(2017-19),福島県日本野鳥の会連携団体連合会,福島県鳥類総目録(2015)

4	鳥類	スズメ目	センニュウ科	オオセツカ	Locustella pryeri (Seebohm,1884)	情報不足	絶滅危惧IB類	沿岸部で渡り時期と越冬期の鳥類調査に僅かではあるが確認している。沿岸部が渡りルートに利用している可能性は高い。しかしながら復興事業や沿岸・河川整備等により生息環境である草地・ヨシ原等が減少しているため、県内での越冬・中継地が消滅する危険性が考えられる。	福島県:ふくしまの野鳥(1996),レッドデータブックふくしま(2002),福島県レッドリスト(2017-19),福島県日本野鳥の会連携団体連合会,福島県鳥類総目録(2015)
5	鳥類	フクロウ目	フクロウ科	コミミズク	Asio flammeus (Pontoppidan,1763)	未掲載	絶滅危惧II類	冬季に県内には越冬個体として僅かに飛来する。過去に浜通り・中通りで記録があるが安定した飛来地は少ない。春秋の記録としてあるものは渡りの通過時における観察事例が考えられる。越冬地の宅地化・開発等による生息環境の変化により、今後生息地が消滅する危険性が懸念される。	福島県:ふくしまの野鳥(1996),レッドデータブックふくしま(2002),福島県レッドリスト(2017-19),福島県日本野鳥の会連携団体連合会,福島県鳥類総目録(2015),日本野鳥の会いわき支部,いわき鳥類目録2015(2015).
6	鳥類	ペリカン目	サギ科	アマサギ	Bubulcus ibis (Linnaeus,1758)	準絶滅危惧	絶滅危惧II類	県内の水田地帯を中心に少数が飛来する。採餌の環境変化・減少により、年々確認される数が少なくなっている。	福島県:ふくしまの野鳥(1996),レッドデータブックふくしま(2002),福島県レッドリスト(2017-19),福島県日本野鳥の会連携団体連合会,福島県鳥類総目録(2015)
7	鳥類	ペリカン目	サギ科	クロサギ	Egretta sacra (Gmelin,1789)	準絶滅危惧	絶滅危惧II類	浜通りの南部と稀に中・北部の岩礁やテトラポットなど、沿岸部で毎年僅かに記録がある。しかし県内で見られる個体数は少ない。	福島県:ふくしまの野鳥(1996),レッドデータブックふくしま(2002),福島県レッドリスト(2017-19),福島県日本野鳥の会連携団体連合会,福島県鳥類総目録(2015)
8	鳥類	スズメ目	ツバメ科	コシアカツバメ	Hirundo daurica Laxmann,1769	準絶滅危惧	絶滅危惧II類	沿岸南部と中通り中部の限られた地域で繁殖が僅かに確認されている。スズメによる巣の乗っ取り行為などで繁殖地が減少傾向があり、今後注視する必要がある。	福島県:ふくしまの野鳥(1996),レッドデータブックふくしま(2002),福島県レッドリスト(2017-19),福島県日本野鳥の会連携団体連合会,福島県鳥類総目録(2015)
9	鳥類	スズメ目	ヨシキリ科	コヨシキリ	Acrocephalus bistrigiceps Swinhoe,1860	準絶滅危惧	絶滅危惧II類	県内の河川・湿原等の草地に飛来し局地的に繁殖している。しかし同じ環境を利用するオオヨシキリと比べると飛来数は極僅かと考えられる。近年開発や環境変化などにより生息場所が年々減少している。	福島県:ふくしまの野鳥(1996),レッドデータブックふくしま(2002),福島県レッドリスト(2017-19),福島県日本野鳥の会連携団体連合会,福島県鳥類総目録(2015)
10	鳥類	スズメ目	ヒタキ科	マミジロ	Zoothera sibirica (Pallas,1776)	準絶滅危惧	絶滅危惧II類	会津地方や中通りの山地等に飛来し繁殖しているが、個体数は多くない。近年確認情報や開発等の環境アセス鳥類調査等での記録が減少している。	福島県:ふくしまの野鳥(1996),レッドデータブックふくしま(2002),福島県レッドリスト(2017-19),福島県日本野鳥の会連携団体連合会,福島県鳥類総目録(2015)
11	鳥類	フクロウ目	フクロウ科	オオコノハズク	Otus lempiji (Horsfield,1821)	情報不足	絶滅危惧II類	県内で繁殖しているが、近年確認記録が各地で減少している。いわき、会津、中通りなどで確認情報があるが、近年の確認記録は少ない。	福島県:ふくしまの野鳥(1996),レッドデータブックふくしま(2002),福島県レッドリスト(2017-19),福島県日本野鳥の会連携団体連合会,福島県鳥類総目録(2015),日本野鳥の会いわき支部,いわき鳥類目録2015(2015).
1	淡水魚類	カサゴ目	カジカ科	カジカ大卵型	Cottus pollux Günther	絶滅危惧II類	絶滅危惧IB類	森林伐採による川底への土砂の堆積、生活排水の流入による水質の悪化と底石への有機物の付着、河川工事による生息環境の単純化により、全体的に個体数は減少している。また、堰の設置は個体群の分断化を引き起こしている。会津地方では、一部で良好な生息地がみられるものの、2019年秋の台風災害により生息地が壊滅的な状況となった場所も多く、2020年現在、それらの場所では個体数が回復していない。	稲葉修(1999)福島県太平洋沿岸水系の魚類, 福島生物, (42):1-17. 稲葉修(2010)会津地方(阿賀野川水系)の淡水魚類, 福島生物, (53):19-32. 倉石信・春本宜範・藤井芳(2017)只見町伊南川における魚類相調査, 只見の自然只見町プナセンター紀要, (6):15-25. 春本宜範・荒木美紀・戸倉溪太・永山駿(2019)只見町の伊南川各支流における魚類相, 只見の自然只見町プナセンター紀要, (7):20-27.
2	淡水魚類	スズキ目	ハゼ科	オオヨシノボリ	Rhinogobius fluviatilis Tanaka	準絶滅危惧	絶滅危惧II類	流域の森林伐採や丘陵地の宅地造成などによる開発行為に伴った土砂の堆積や、生活排水の流入による水質の悪化や川底への有機物付着などにより、県内の多くの生息河川で個体数が減少している。近年、風力発電、太陽光発電の設置が増加しており、清流を好む本種にとってさらに大きなダメージが進んでいる。	稲葉修(1999)福島県太平洋沿岸水系の魚類, 福島生物, (42):1-17. 稲葉修(2010)会津地方(阿賀野川水系)の淡水魚類, 福島生物, (53):19-32. 稲葉修・倉石信(2015)相馬市の淡水魚類, 相馬市史第8巻特別編 I 自然:675-727.
3	淡水魚類	コイ目	コイ科	スナゴカマツカ	Pseudogobio polystictus Tominaga and Kawase	情報不足	準絶滅危惧	主に生息する河川中～下流域では、河川工事による環境の変化、生活排水の流入による水質の悪化が著しい。さらに本種の好む砂底や砂礫底には森林伐採による土砂、生活排水流入による有機物が堆積するなどの影響もある。これらのことから、県内の多くの生息地で本種の生息環境は安定しておらず、個体数も減少している。	稲葉修(1999)福島県太平洋沿岸水系の魚類, 福島生物, (42):1-17. 稲葉修(2010)会津地方(阿賀野川水系)の淡水魚類, 福島生物, (53):19-32. 倉石信・春本宜範・藤井芳(2017)只見町伊南川における魚類相調査, 只見の自然只見町プナセンター紀要, (6):15-25. Tominaga K, Kawase (2019) Two new species of Pseudogobio pike gudgeon (Cypriniformes: Cyprinidae: Gobioninae) from Japan, and redescription of P. esocinus (Temminck and Schlegel 1846). Ichthyol Res 66:488-508
4	淡水魚類	スズキ目	ハゼ科	シマヨシノボリ(新規)	Rhinogobius nagoyae Jordan and Seale	未掲載	情報不足	県内では太平洋流入河川に生息する。比較的普通に確認されるハゼ科魚種であったが、近年、確認個体数が減少している。ダムや堰による生息域の分断、河川工事や土砂、生活排水の流入による影響が疑われるが、他種のハゼ類との競合も含め、減少理由についての情報が不足している。	稲葉修(2001)平成12年度企画展木戸川・井出川を探る-淡水魚-(図録), 榎葉町歴史資料館, 福島. 稲葉修(1999)福島県太平洋沿岸水系の魚類, 福島生物, (42):1-17. 稲葉修・倉石信(2015)相馬市の淡水魚類, 相馬市史第8巻特別編 I 自然:675-727.

1	両生類	無尾目	アカガエル科	トノサマガエル	<i>Pelophylax nigromaculatus</i> (Hallowell, 1861)	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	生息水田の圃場整備事業や、地域事情による耕作放棄によって生息地が減少したり、生息するエリアが分断されて連続性を失い、孤立するなどの状況が年々顕著になってきている。また、2019年秋の台風災害により、生息地そのものが消失した場所もある。これらの事象により、本種は減少している。	伊原禎雄・松島野枝・吉川夏彦監修(2015)平成27年度特別展ふくしまに生きる爬虫・両生類(図録), 南相馬市博物館, 福島。 日本爬虫両棲類学会, 2020. 日本産爬虫両生類標準和名リスト(2020/11/16版). <a href="http://herpetology.jp/wamei/index_j.php">http://herpetology.jp/wamei/index_j.php</a>
1	爬虫類	有鱗目	ナミヘビ科	ジムグリ	<i>Euprepiophis conspicillatus</i> (Boie, 1826)	情報不足	準絶滅危惧	山間部では健在種であるが、人里に近い丘陵地では宅地造成や太陽光発電などの開発行為により、生息環境が悪化している。また、丘陵地を背後に控えた沿岸域の津波被災地では、丘陵地から連続していた水田環境が失われただけでなく、復興工事によって環境は大きく変化し、本種の再確認ができていない。	稲葉修(1999)阿武隈山地の福島県地域における両生類と爬虫類, 福島生物, (42):25-34. 伊原禎雄・松島野枝・吉川夏彦監修(2015)平成27年度特別展ふくしまに生きる爬虫・両生類(図録), 南相馬市博物館, 福島。
1	淡水性二枚貝	イシガイ目	カワシンジュガイ科	カワシンジュガイ	<i>Margaritifera laevis</i> Haas	未掲載	絶滅危惧ⅠB類	県内の生息地の多くで、河川工事による環境の変化や、森林伐採により流入した土砂の堆積、生活排水の流入、乱獲などの問題が深刻化している。また、本種のグロキジウム(幼生)が寄生するヤマメも、上記の理由により減少傾向にある。河川によっては、若い個体の確認ができず、近年の繁殖が成功しているか疑問である。本種を取り巻く状況は悪化する一方で、個体数の減少に歯止めが利かない。	稲葉修(1996)阿武隈高地のカワシンジュガイ-新発見地と保護について-, 茨城生物, (17):20-22. 稲葉修(2004)阿武隈高地におけるカワシンジュガイの成長量, 南相馬市博物館研究紀要, (6):55-60.
2	淡水性二枚貝	イシガイ目	イシガイ科	イシガイ	<i>Nodularia douglasiae nipponensis</i> Martens	未掲載	情報不足	県内では、現在までに浜通りの2地点からしか見つからない。護岸工事や土砂の堆積、生活排水の流入によって生息環境は悪化していると考えられるが、評価するだけの情報が不足している。 Lopes-Lima, M. ほか(2020)、近藤(2020)では「タテボシガイ」とされる。	稲葉修(2007)福島県東部で確認したイシガイ, 南相馬市博物館研究紀要, (9):53-56. Lopes-Lima, M. ほか(2020) Freshwater mussels (Bivalvia: Unionidae) from the rising sun (Far East Asia): Phylogeny, systematics, and distribution. <i>Molecular Phylogenetics and Evolution</i> , 146: 近藤高貴(2020)イシガイ科貝類の新たな分類体系. ちりぼたん, 50: 294-296.
3	淡水性二枚貝	イシガイ目	イシガイ科	ヨコハマシジラガイ	<i>Inversium jokohamensis</i> Ihering	未掲載	絶滅危惧Ⅱ類	県内各地に生息しているが、生息地の多くで生活排水が流入したり、河川工事による川底環境の変化があり、生息環境や個体数が安定した生息地は極めて少ない。マニアや業者による乱獲も行われている。東日本大震災後の復興工事で失われた生息地も存在する。	Lopes-Lima, M. ほか(2020) Freshwater mussels (Bivalvia: Unionidae) from the rising sun (Far East Asia): Phylogeny, systematics, and distribution. <i>Molecular Phylogenetics and Evolution</i> , 146: 近藤高貴(2020)イシガイ科貝類の新たな分類体系. ちりぼたん, 50: 294-296.
4	淡水性二枚貝	イシガイ目	イシガイ科	マツカサガイ	<i>Pronodularia japonensis</i> Lea	未掲載	絶滅危惧Ⅱ類	県内での生息地はヨコハマシジラガイと比較すると少ない。河川や水路の工事、生活排水の流入などにより、グロキジウムの寄生する魚類とともに減少している生息地が多い。Lopes-Lima, M. ほか(2020)、近藤(2020)では、会津の個体は「マツカサガイ広域分布種」、中通りと浜通りの個体は「マツカサガイ北東本州固有種」とされる。	稲葉修(2003)淡水二枚貝類, 浪江町史別巻Ⅰ浪江町の自然:158-162. Lopes-Lima, M. ほか(2020) Freshwater mussels (Bivalvia: Unionidae) from the rising sun (Far East Asia): Phylogeny, systematics, and distribution. <i>Molecular Phylogenetics and Evolution</i> , 146: 近藤高貴(2020)イシガイ科貝類の新たな分類体系. ちりぼたん, 50: 294-296.
5	淡水性二枚貝	イシガイ目	イシガイ科	カラスガイ	<i>Cristaria plicata</i> Leach	未掲載	情報不足	県内では、浜通りの一部から死殻が確認されているにすぎない。東日本大震災後は確認されておらず、現在の生息状況は不明。現段階では、評価するだけの情報が不足している。 Lopes-Lima, M. ほか(2020)、近藤(2020)では「メンカラスガイ」とされる。	Lopes-Lima, M. ほか(2020) Freshwater mussels (Bivalvia: Unionidae) from the rising sun (Far East Asia): Phylogeny, systematics, and distribution. <i>Molecular Phylogenetics and Evolution</i> , 146: 近藤高貴(2020)イシガイ科貝類の新たな分類体系. ちりぼたん, 50: 294-296.
6	淡水性二枚貝	イシガイ目	イシガイ科	ドブガイ類	<i>Beringiana</i> spp. + <i>Sinanodonta</i> spp. + <i>Buldowskia</i> spp.	未掲載	情報不足	山岳部を除く県内各地に生息している。Lopes-Lima, M. ほか(2020)、近藤(2020)によりイシガイ類の分類が見直され、本県にはタガイ、ヌマガイ、カタドブガイ、ヒガシタブネドブガイの4種が生息することが明らかになった。溜池や水路の工事、圃場整備事業によって消滅した生息地も多く、全体的に減少していることは間違いない。ただし、県全域の調査は進行中であり、評価するだけの情報はまだ十分に集まっていない。	稲葉修(2003)淡水二枚貝類, 浪江町史別巻Ⅰ浪江町の自然:158-162. 稲葉修(2005)淡水二枚貝類, 原町市史第8巻特別編Ⅰ自然:798-812. Lopes-Lima, M. ほか(2020) Freshwater mussels (Bivalvia: Unionidae) from the rising sun (Far East Asia): Phylogeny, systematics, and distribution. <i>Molecular Phylogenetics and Evolution</i> , 146: 近藤高貴(2020)イシガイ科貝類の新たな分類体系. ちりぼたん, 50: 294-296.